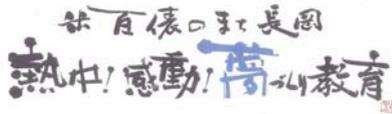


令和5年11月16日

報道機関各位



長岡市立阪之上小学校長

創立150周年! 伝統を引き継ぎ 未来を創造する 阪之上小が第20回 英語劇「米百俵」を上演

阪之上小学校は、地域総合活動として「ふるさと長岡に学び、未来を創造する気概をもつ子ども」を育てています。生活科や総合的な学習の時間には、6年間かけて長岡の自然・歴史・文化について学んでいます。また、コミュニケーション能力を高めることを目的に、先人の意思や友達の思いに耳を傾けながら、英語で自分の思いを伝える活動を行っています。

このたび、6年間の学びの集大成として英語劇「米百俵」を上演します。米百俵の精神を英語劇で表現し、多くの方々にこれからを生きる自分たちの思いを伝えます。

つきましては、下記のとおり概要をお知らせしますので、ぜひ取材くださるようお願いいたします。

阪之上小 第20回 英語劇「米百俵」

- | | |
|---------|---|
| 1 日 時 | 11月24日(金) 午後4時30分～6時5分
※開場：午後4時 |
| 2 場 所 | 長岡リリックホール シアター (長岡市千秋3-1356-6) |
| 3 内 容 | (1) 学校長あいさつ
(2) 児童代表ウェルカムスピーチ
(3) 英語劇「米百俵」
(4) フィナーレ |
| 4 参 加 者 | 6年生児童 40人 |
| 5 そ の 他 | 詳細については、別紙チラシをご覧ください。 |



▲昨年の様子

(問い合わせ：長岡市立阪之上小学校 教務主任 清野 TEL：0258-32-2134)

チャレンジ学年が米百俵の精神を伝えます



One Hundred Sacks of Rice

Education will change Nagaoka.

英語劇 米百俵



小林虎三郎

2023.11.24 [FRI] OPEN 16:00 START 16:30

長岡リリックホール シアター

入場無料

長岡市立阪之上小学校6年チャレンジ学年 / 長岡市教育委員会英語指導室ALT

PROGRAM

1. 学校長あいさつ
2. ウェルカムスピーチ (児童代表)
3. 英語劇「米百俵」
4. フィナーレ

伝統を引き継ぎ、未来を創造する阪之上校

米百俵の故事は、戊辰戦争に敗れた長岡藩に送られた救援米を売り、教育の費用に充てたことに由来します。150年の時を経て、「米百俵の精神」は阪之上小学校の子どもたちの中に、脈々と受け継がれています。

子どもたちは、総合的な学習の時間を中心に長岡の歴史や文化、学校の成り立ちなどを学習してきました。6年間の学習の集大成として、「米百俵の精神」を英語劇で表現し、より多くの人にこれから生きる自分たちの思いを伝えます。



阪之上小学校HP▶



One Hundred Sacks of Rice

英語劇「米百俵」あらすじ

写真は昨年度の様子



第1場 旅立ち

小林虎三郎は幼い頃、天然痘という重い病にかかり左目を失明し、顔には発疹の跡が残ってしまいました。虎三郎は、これらのことで友だちにいじめられても、父母の励ましのもとに勉学に励みました。当時、長岡藩の藩士の子どもは崇徳館そうとくかんという学校で勉強をしていました。虎三郎は優秀さを認められ、藩主より江戸で更に学問を積むように命ぜられました。そして21歳になった虎三郎は、希望と誇りを胸に人々に見送られて江戸へ旅立っていきました。

第2場 ペリーがやって来た!

1853年、突然浦賀に軍艦4隻が現れました。アメリカ合衆国のペリー総督が日本に開国を迫ったのです。

虎三郎は日本の将来を心配し、下田よりも神奈川を開港した方が日本に有利であると説きました。しかし、学生の分際で国の重大決定に意見するなど無礼であると叱られ、長岡へ帰り謹慎せよと命ぜられてしまいました。失意の内に虎三郎は長岡へ帰りました。日本が幕末に向かって、ひたひたと不穏な時を重ねていった時代です。



第3場 戊辰戦争

1868年小千谷の慈眼寺で、西軍の指揮官岩村精一郎と河井継之助が会談しました。継之助は戦争を避けるため、嘆願書を渡そうとしました。しかし、岩村精一郎にはねつけられてしまいました。

思い余った継之助は川島億二郎を訪ね、開戦の運びになったことを報告しました。はじめは他に方法がないものかと思案していた億二郎も、継之助の「自分の首を差し出せ」という言葉について説得されます。そして、戊辰戦争が始まってしまいました。

第4場 子どもたちの未来のために

激しい戦いの後、とうとう長岡藩は落城してしまいました。帰ってきた藩士やその家族を迎えたのはすっかり焼け野原となってしまった城下町でした。住むところも食べるものもない藩士たちに冬の寒さが襲い、多くの人が亡くなりました。

虎三郎がこのような長岡の窮状をなんとかしなければと思い悩んでいた時、親戚の三根山藩から百俵の米が救援米として送られてきました。すぐにでも「米を分けよ」と迫る藩士に、虎三郎は「国が興るのも滅びるのもことごとく人にある」と論じました。そして百俵の米を売って教育のための費用に充てると告げました。常在戦場の精神を忘れず、長岡の未来のために今を耐え忍ぼうと説く虎三郎に、やがて藩士たちも涙を流しながら同意しました。それは、朝日とともに長岡の未来を予感させるものでした。

